

## 特別展「肖像画の魅力—歴史を見つめた眼差し—」

平成24年2月11日（土・祝）～3月20日（火・祝）

歴史上の人物の容姿を描いた肖像画は、現代の私たちにとってその人物をイメージする上で欠かせないものとなっています。古来、日本では似顔絵など像を写されることをよしとしない風潮がありましたが、像主の面影を描き伝えたいという思いから、生前に描く<sup>じゆぞう</sup>寿像や没後に描く<sup>いぞう</sup>遺像が作られてきました。また後世に物語や伝説などからイメージして絵師が描いた歴史的人物画（想像画）とよばれる作品が作られました。

江戸時代も半ばを過ぎると肖像画の像主、描き手、表現方法に変化があらわれます。特に「絵師」以外の者が描いた肖像画は、中国や西洋の技法が導入され、より写実的な方向に向かいます。幕末期から明治にかけ写真機の技術が入ってくると、絵画と写真との新しい関係が成立します。写した写真をもとに絵画を描くという方法です。

本展では肖像画が描かれた意味を考えるとともに、特に近世期の肖像画制作における技法に着目し、その表現方法の源泉を明かそうと試みました。肖像画自体が歴史の流れを見つめながら今の私たちに投げかける「肖像画の魅力」を感じ取っていただければ幸いです。

以下、主な内容を紹介します。

### 第1章 肖像画とは何か—つくられた姿と描かれた生きざま—

肖像画は大きく分けると死後に描かれた遺像と生前に描かれた寿像・<sup>にせえ</sup>似絵・<sup>ちんぞう</sup>頂相と分けることができます。日本の肖像画の多くは遺像です。それは生前に肖像をつくと良からぬ事が起こると考えられ、忌み嫌う風潮があったからです。

かつて、肖像画の像主に誰もがなれたわけではありませんでした。日本では<sup>がんぽう</sup>顔貌を主体に描きましたが、絵師は注文主にあえて似せずに、理想化された尊像を描きました。身分制社会の中で、制約された条件の下で制作していたものと推察されます。ここでは、頂相・僧侶の肖像、茨城ゆかりの肖像、徳川家の肖像を紹介します。



武田晴信（信玄）像  
高野山持明院蔵（和歌山県）

### 第2章 水戸藩ゆかりの肖像画—顔を残すとは、見つめた歴史を残すこと—

江戸時代、大名の肖像画はどうだったのでしょうか。お抱えの御用絵師たちによる肖像画が多く作成されていたようです。水戸藩では、開国の荒波が押し寄せる波乱の幕末期に<sup>ちゆうけん</sup>中堅や若手の藩士たちに<sup>ようりつ</sup>擁立されて水戸藩主になった徳川齊昭が、外からの圧力

に翻弄<sup>ほんろう</sup>されていく日本や水戸藩を立て直さんとする改革者として時代の表舞台に押し出されてきました。改革をめざす若手藩士との一体感が残したものが、全国的に珍しい藩士たちの「写実的な」肖像画集です。斉昭は自らの肖像は、水戸詰め<sup>みづのつめ</sup>の藩士萩谷<sup>はぎのや</sup>善<sup>せき</sup>喬<sup>きょう</sup>に描かせました。また藩士たちの肖像は江戸詰め<sup>えどづめ</sup>が中心の藩士内藤<sup>ないとう</sup>業<sup>なり</sup>昌<sup>まさ</sup>に多くの肖像画を描かせました。それぞれの立場で、画の達者な藩士を「絵師」として後世に画稿を含む多くの肖像画を残しました。ここでは、藩主斉昭像を中心に紹介します。



徳川斉昭自画賛 徳川斉昭筆  
松戸市戸定歴史館蔵

### 第3章 写実的表現への道筋一人柄を写せ！されば、「生き写し」の鏡をー

肖像画がさまざまな制約から解放されて、写実性を帯びるようになったのは、江戸時代後半です。江戸南画の総帥谷文晁<sup>そうすい いたにぶんちやう</sup>は、肖像画について「形だけおって似ていれば良しとするのではなく、意（人柄）を写すことが大切」（『文晁畫談』）と説いています。その人らしさ、精神の似姿を写し取ることを主張しました。田原藩士の渡辺<sup>わたべ</sup>華<sup>はな</sup>山<sup>さん</sup>は、肖像画の傑作を何点も残しました。華山は画技の精進と共に、蘭学を学び、西洋画法の陰影法により、立体的に肖像を表現しました。また、周辺の人々の記録により、オランダより伝わったとされる「写真鏡（カメラオブスキュラ）」を使用したと考えられる作品が何点かあります。この道具は寛政年間以降、大槻<sup>おおいつき</sup>玄<sup>げん</sup>沢<sup>たく</sup>や司馬<sup>しば</sup>江<sup>かう</sup>漢<sup>かん</sup>の著書にも登場します。ここでは道具を使った写実的表現方法の考察を中心に作品を紹介します。



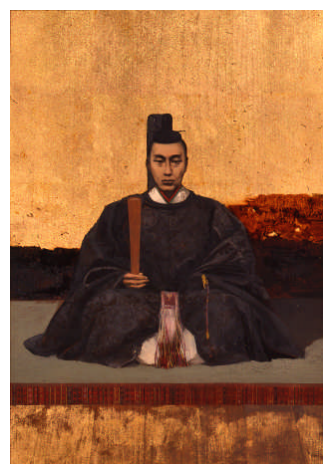
重要美術品 佐藤一斎像  
(第二稿)渡辺華山筆

### 第4章 写真と肖像画ー歴史の一瞬を切り取るということー

幕末期、写真機の登場で肖像画のあり方が大きく変わりました。斉昭の七男の徳川慶喜<sup>けいぎ</sup>は将軍であった期間が一年に満たずに政権を返上したため、没後御用絵師により描かれる将軍としての肖像画が残っていません。しかし、慶喜は将軍就任前から自らがモデルとなり多くの写真を撮らせています。写真による権力者のイメージ形成を真剣に考

えたのです。

明治時代になると、明治天皇の肖像画が写真から何度か制作されました。肖像画が写真にすぐにとって代わられなかったのは、当時の写真は小さく、またなまじ色が著しいなどの課題があり、綺麗な色を残すには絵の具で描く肖像画（油彩や日本画）が求められたためです。写真をもとに人物を描くことで肖像画は新たな活路を見出したのです。ここでは写真で写された瞬間の顔が、肖像イメージの出発点となった作品を紹介します。



徳川慶喜像 川村清雄筆

徳川記念財団蔵

- 講演会 演題「肖像画の成立と展開」  
日時 3月4日（日）午後1時30分～3時30分  
会場 当館 講堂  
講師 守屋 正彦 氏（筑波大学教授）  
定員 200名（先着順・要入館券）
- ミニ講演会 演題「徳川斉昭と三名君－真田幸貫・松浦静山・大関増業－」  
日時 2月12日（日）午前10時～11時  
演題「徳川慶喜のメッセージー肖像写真の活用ー」  
日時 3月17日（土）午前10時～11時  
会場 当館 講堂（要入館券）  
担当 学芸課長 永井 博
- ミニ講座 第1回「様々な肖像画」  
日時 2月19日（日）午前10時～11時  
第2回「徳川斉昭と水戸藩士の肖像」  
日時 2月26日（日）午前10時～11時  
第3回「肖像画の描き方」  
日時 3月11日（日）午前10時～11時  
会場 当館 講堂（要入館券）  
担当 主任研究員 原口 知武
- 展示解説 日時 2月18日（土）・3月18日（日）  
午前11時～・午後1時30分～  
会場 展示室（要入館券）  
担当 主任研究員 原口 知武
- よろいかぶと体験 日時 3月3日（土） 午前10時～12時  
会場 当館 講堂  
定員 先着順 定員30名（小・中学生対象）
- ミニ掛軸と  
はんこづくり 日時 3月10日（土）午前10時～12時  
会場 当館 講堂  
定員 先着順 定員20名